

『ジョージ4世国王陛下の戴冠式』

文化女子大学非常勤講師（服装史〈西洋〉担当） 黒川 祐子

贅沢な芸術愛好家として知られるイギリス国王ジョージ4世（1762－1830）は、1821年7月19日のウェストミンスター寺院（Westminster Abbey）での戴冠式に24万ポンドもの巨費を投じたとも伝えられている。この戴冠式の模様を「もっとも華麗に描いた作品」として書誌学者ジャック＝シャルル・ブリュネ（Jacque Charles Brunet, 1780－1867）があげたのが本書“The Coronation of His Most Sacred Majesty King George the Fourth”である。大型フォリオ判で、189ページ・5部構成のテキストと45枚の銅版画によるプレートからなる。本書は当時イギリス王室のガーター首席上級紋章官であったジョージ・ネイラー卿（George Naylor, 1764頃－1831）が政府の承認を得てこれを手がけ、1825年と1827年にその一部を発行した。ところが1831年ネイラー卿が死去して以降編纂が滞り、1835年出版業者のヘンリー・ジョージ・ポーンが版權と共にこれを買取り、クラレンス上級紋章官であったウィリアム・ウッズ卿らの助力を得て完成し、1837年ロンドンで刊行した。42枚のプレートが手彩色によるもので、そのうちの9枚はアクアチントの技法を用い大画面を描いている。13世紀末エドワード1世の時代に起源する「聖エドワードの椅子」につく王が、参列者の見守るなかカンタベリー大主教から戴冠を受ける画は大画面図を代表する1枚である。残りの33枚には、王侯貴族や聖職者のほか、大法官、おうじしやうしよ王璽尚書、大蔵大臣、王室執事長、枢密院の書記やメンバーといった列席の高官らが華麗な衣装とともに全身像で表されている。フィリップ・ステファノフ（Philip Stephanoff, 1788頃－1860）やチャール

ズ・ワイルド（Charles Wild, 1781－1835）など、当時イギリスで活躍した画家の名を画面下に確認することができる。

テキストの第1部から第3部には、高官や貴族らが戴冠式での役割などに関し大法官裁判所や枢密院に提示した請願書が、第4部には式前日の7月18日までに戴冠式に関わり交わされた公式文書が記録されている。戴冠式当日の様子は、19日早朝の祝福の鐘を描写して始まる第5部の記述に厳密に再現されている。午前10時過ぎウェストミンスター・ホールから寺院へと向かう王と参列者らの行進の場面は、華やかな大行列を想像させる。新国王の承認、国王の宣誓、塗油による王の聖別、ウェストミンスター首席司祭とカンタベリー大主教からの拍車・剣・国王のロープ・宝珠・指輪・笏の王への授与、戴冠、祝別、新国王の着座、司教・王族らの国王への臣従の誓い、聖餐、祝宴の儀へと式は進む。クリムソン赤紫のロープで入場した王は、聖別の儀ではこれを脱がされ、ウェストミンスター首席司祭から内着の上に金布の表着（スーパーニッカsuper tunica）を着せつけられる。さらにその上に「金糸に金・銀のプロケード織」で「アーミンの毛皮を裏打ちした」「国家のダルマティカ」（Dalmatic Robe of State）を授けられるのである。聖職者の法衣では、ウェストミンスター首席司祭がまとうコープ（cope）のほか、カンタベリー大主教が着るロシェット（rochet）や聖歌隊の少年たちが着るサープリス（surplice）などの白衣の記述がある。祝宴に催される儀式のなかで「チャンピオン」（Champion）と称する全武装の騎乗の勇士が、長手袋（gauntlet）を脱ぎ捨て「我らが国王を否定す

る者は命に代えてこれと戦う覚悟あり」と王の擁護を宣言する場面は面白い。

さて図1の人物はこの戴冠式で「その品性においてもっとも際立っていた」と賞賛を受けたガーター騎士団の一員である。「ガーター騎士団」はエドワード3世(1312-1377)の時代に創設され、この侯爵の左脚にもみえる「青色の靴下留め」が彼らの和合と騎士道精神を表すしるしとされてきた。14世紀舞踏会でダンスに興じていた「ケントの美女」がうっかり靴下留めを床に落としてしまう。これを拾ったエドワード3世が自らの脚に着け、動揺する彼女をかばったのがその名の由来とされている。侯爵の「青色の靴下留め」とイギリスの守護聖人・聖ジョージの十字架のある肩章にある文字は、上述の行為を嘲笑されたエドワード3世が「これを悪意に解する者は恥じ入るべし」(“Honi soit qui mal y pense”)と周囲をとがめた言葉に因むという。また図2は国王の親衛隊ヨーマン隊の衛士の像である。ヨーマン隊は1485年ヘンリー7世が制定した国王の常備護衛兵が起源で、この戴冠式でも行進の最後尾で王を護った。金の縁取りのある上衣の深紅地はイギリス王室の色に由来する。胸部のデザインは歴代のイギリス国王の戴冠に使われた「聖エドワードの王冠」とアイ

ルランドの国花であるシャムロック(shamrock)である。1801年イギリスが北アイルランドを併合したことから採用されたいい。

観覧席には衿開きの広いハイ・ウエスのドレスを着た気品に満ちた貴婦人たちの姿がみえる。女性たちはエンパイア・スタイルからロマンチック・スタイルに移行する1820年代に典型的な装いである。一方壇上で式を執る男たちのほとんどは、長い切り込みで膨らみをもたせた上着に半ズボンの装いである。祝宴で給仕をする小姓たちが「金レースのついた深紅のコートに青い帯を締め、白絹の半ズボンをはいたアンリ4世(1553-1610)風の装い」と表されているように、これらが16世紀から17世紀の服装を模していることは明らかである。ジョージ4世といえば、控えめな装いをモットーとしたダンディズムの先駆者ジョージ・ブランメル(George Brummell, 1778-1840)のパトロンとしても有名である。この日祝賀ムードのロンドンの街に、暗色のフロック・コートを着たブランメル調の装いの紳士たちが繰り出していたことを考え合わせると、襜褕と薔薇結びで飾った儀式的男たちの装いがなおさら愛らしい。



図1 ガーター騎士団の騎士、
ロンドンデリー侯爵



図2 ヨーマン隊のジョージ・コルマン副官